



日本糖尿病・妊娠学会

一般社団法人

日本糖尿病・妊娠学会 ニュースレター

The Japanese Society of Diabetes and Pregnancy News Letter

2017年5月発行 Vol.19 No.1

第36号

第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会の見どころ

テーマ：母児の健康と糖代謝異常

日時：平成29年12月2日(土)・3日(日) 会場：シーガイアコンベンションセンター(フェニックス・シーガイアリゾート内)



第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会会長

鮫島 浩

宮崎大学医学部附属病院院長
宮崎大学医学部発達泌尿生殖医学
講座産婦人科学分野 主任教授

第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会を2017年12月2、3日の両日に宮崎市のシェラトン・グランデ・オーシャンリゾート、シーガイアコンベンションセンターで開催いたします。今回初めて宮崎でお世話させていただくことをたいへん光栄に存じます。テーマは原点に戻って「母児の健康と糖代謝異常」といたしました。

前回の岡山(清水一紀会長)から2年越しに企画されたシンポジウム「多胎妊娠と糖代謝異常」を発展させたいと考えています。類似のデータをもつ施設をまとめて数を増やした形での結論、また多胎における他の問題点、最新の研究などの演題も募集して、多角的に多胎と糖代謝異常の問題点を攻めていきたいと思います。一方、次回の第34回(守屋達美会長)に引き継ぐ形でのシンポジウムを企画していただきました。テーマは「本邦においてGDMは本当に2型糖尿病になりやすいのか?その頻度は?フォローアップの仕方は?(仮題)」です。日本におけるGDMの頻度がHAPO study後に実際に増えたか、GDMの2型DMへの移行を早期発見するためにはどのようにフォローアップしたらよいのか、2型DMへの移行を阻止するにはどうしたらよいのかなど、臨床上たいへん興味ある内容になっています。

スポンサーセミナーには海外招聘講演として、米国オハイオ州 Case Western Reserve 大学 Reproductive Biology 学教授 Sylvie Hauguel-De Mouzon 先生をお招



きして、母体環境と胎児発育を調節する子宮内のメカニズムについてのお話をさせていただきます。

学会認定講座は小児科領域講習として日本の新生児医療を牽引してこられた楠田 聡先生に、糖尿病母体から出生した児の管理についての講演をお願いいた

します。小児科医のみならず、産科医やコメディカルスタッフも多数ご参加ください。

また、第31回(内湯安子会長)から始まった助産師集中講座は好評であり、1回目の基本の「き」、2回目の基本の「ほ」に引き続き、福井トシ子先生のご協力をいただきまして、本学会では「妊娠中の血糖コントロール基本の「ん」がわかる!!」を企画しています。プログラムの内容は、1. 妊娠中の血糖コントロールに必要な検査 2. 糖代謝異常母体出生の治療が必要となる新生児 3. 妊娠期の糖代謝異常とケア 4. 事例で考えよう! 妊娠各期の支援のポイント が予定されています。助産師の皆さんにとって、母児の健康に求められる血糖管理の理解を深める良い機会となると思います。

一般演題は、日常診療の現場における症例や問題、研究など、内科、小児科、産婦人科医師や看護師、助産師、保健師、栄養士、薬剤師などコメディカルの方も奮ってご応募お願いいたします。

日本のひなた宮崎県の師走は、通常晴天に恵まれる季節です。学会の後は、美味しい焼酎や宮崎牛、地鶏などをとお楽しみいただければ幸いです。会員の皆様には、日常のチーム医療のコメディカルの方々にもお声をかけていただき、母児の健康を希求する日本全国から多数の方々のご参加を心からお待ち申し上げます。

● 発行人 理事長 平松祐司

● 発行 一般社団法人 日本糖尿病・妊娠学会 www.dm-net.co.jp/jsdp/

TEL.03(5521)2881 FAX.03(5521)2883

編集制作：(有)知人社 ロゴマークデザイン：杉山光章

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル(株)創新社内

学術集会の在り方を思う



清水 一紀

心臓病センター榊原病院
糖尿病内科

2016年11月に岡山市において第32回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会を開催し、いろいろ思うことがあった。まず本学会は、糖尿病学と産科学という異なった学問の間に存在する領域を研究するものである。会員は内科医、産婦人科医、小児科医の3本柱と、助産師、看護師、栄養士のコメディカルである。近年では学問の細分化が進み、発生学、新生児学、看護学、栄養学などさまざまな領域の専門家も参加するため、時にはなじみのない演題も発表される。一方で、新たに勉強したいと思う者や、自分の専門分野でない学問の基本を知りたい参加者もあり、学術集会ではいわゆる学際的アプローチが求められる。

もともと糖尿病と妊娠の問題は、糖尿病合併妊娠をいかに成功させるかということから始まったが、現在は妊娠糖尿病が一般に浸透したため、本学会も妊娠糖尿病のみを扱うものと認知されることも多い。そのため日本糖尿病学会の会議のなかでも、本学会を日本妊娠糖尿病学会と言われることも多く、大森名誉理事長が憤慨された場面をたびたび目にしたものである。糖尿病合併妊娠は、主に妊娠前からの管理や合併症対策などが求められるが、妊娠糖尿病は分娩後の糖尿病予防が重要である。このようにライフステージにおける関わり方についても職種や専門性はさまざまである。

個々の専門性と学際性をどのように学術集会のプログラムに反映するかということを考えていたが、そんな難しいことは私には無理だと悟った。空前絶後の学会などできるわけがないと開き直ったわけである。その結果、劇症1型糖尿病、周産期心筋症、SAPハンズオンセミナー、糖尿病合併妊娠のピアサポートなどをプログラムに盛り込んだのである。劇症1型糖尿病は、当初は非自己免疫性と考えられていたが、妊娠やHLAが関与することなどから免疫の関与も否定できないとしたのが私の持論であった。近年のT細胞とマクロファージの情報伝達に関与する癌免疫製剤が、劇症1型糖尿病を発症することでの免疫との関わりが注目されている。周産期心

筋症は現在の施設で1例経験した。まだ症例数が少ないものの死に至る重篤例も多く、妊娠を取り扱う医療者は知っておくべき疾患と考えられた。これらの妊娠のピットフォールとなる内科疾患に対し、それぞれ第一線の先生にレクチャーをお願いした。両レクチャーの講師の力もあり大変好評であった。今現在、最も進んだインスリン療法であるポンプ療法に、リアルタイムCGM機能が付加したSAP治療がわが国の保険診療の適応となった。1型糖尿病を中心として、糖尿病合併妊娠では使用されることの多い治療となりつつあるが、一部の専門家以外にはほとんどなじみがなく、分娩時には多くの場合、患者自らがポンプのコントロールをしているのが現状である。そこで実際にポンプを手に触ってみるハンズオンの機会をつくったのだが、参加者のほとんどが経験のある内科医やコメディカルで、産科病棟で認知してもらうにはまだまだ時間がかかるようである。ピアサポートはファシリテーターをお願いした先生方のご尽力のおかげで参加者から好評であったが、学会の中で医療者でない患者が参加することの規制もあり、課題も残った。

小児科領域、産科領域などについては、愛媛大学チームと今年度学術集会会長の鯨島先生に一任しシンポジウムを企画していただいたところ、小児は子どもの食育について、産科は多胎妊娠についてのテーマで、内容の濃い討論を行っていただいた。また、前々回学術集会会長の内潟先生が始められて好評であった福井トシ子先生の助産師セミナーなど、好評な企画を引き継がせていただいた。海外招聘講師はスペインからLeiva先生をお招きし、素晴らしい内容のご講演をいただき、無事に大役を果たせたと思っている。

しかし、会場が1会場でできなかったこと、とくにメイン会場の医師会館が飲食禁止（後から知ったことだが）のためランチョンセミナーなど他会場に移動が必要であったこと、会期がいろいろな行事と重なり宿泊施設が十分でなかったことなど、ホスピタリティの部分を含め反省点も多かった。

いったいこのような学会の学術集会とは何を得るためにするのだろうかと考えたとき、今思うことは、つながりをもつことであると感じる。他人とのつながりだけでなく、今まで疑問に思っていた謎を解くような講演や発表を聴くことができること、最先端の研究やレベルの高い臨床を知ることができること、または180度転じて、その土地の文化や風土、歴史を知ることとも重要な要素である。なかでも中身のある発表があると自分も頑張らな

くてはと刺激されるものである。

一方で、さまざまな規制、とくに税制などの面で、過去に比べると学術集会の運営は経済的に大変厳しくなっている。参加費は大きな収入源であり、参加者が少ないと学術集会の運営は厳しい。前述の目的を果たしながら、参加する意義が大きい日本糖尿病・妊娠学会年次学術集

会が開催されることを期待する。結局のところ、良い学術集会とは、良い発表がたくさんある、参加者のためになるものだと思う。今回そういった意味ですばらしい発表をいただいた多くの先生方、参加者、支援いただいた企業などに、この場を借りて改めて感謝申し上げたい。

International Association of Diabetes Pregnancy Study Group (IADPSG, わが国の呼び名：国際糖尿病・妊娠学会) の経緯



名誉理事長

大森 安恵

海老名総合病院・糖尿病センター長

2020年11月に平松祐司理事長を会長として、古都・京都で第6回国際糖尿病・妊娠学会（以下IADPSG）が開催される。第36回日本糖尿病・妊娠学会との共催ゆえ、杉山 隆会長はIADPSGの副会長も兼務されることになっている。IADPSG設立当初から関与してきた筆者にとって、この学会が本邦で開催されるのは大変喜ばしいことではあるが、同時にそれは日本糖尿病・妊娠学会の全会員にとっても重要な事だと考える。そこで、諸氏の知識のために、IADPSGの歴史と今回日本開催に至った経緯を述べようと思う。

1994年12月、日本の「糖尿病と妊娠に関する研究会」第10回記念大会（会長 大森安恵）は、世界各国から糖尿病と妊娠に関する超一流の専門家、Prof. J. Oats（豪）、Prof. S. Grasso（伊）、Prof. L. Jovanovic（米）、Assoc. prof. B. Persson（スウェーデン）を招聘し、開催した。

この時、彼らはこぞって国際的な交流の重要性、世界を知ることの大切な意義を主張し、それをヨーロッパ糖尿病学会のDiabetes Pregnancy Study Group (DPSG)に提案した。その結果、ヨーロッパ、日本、アメリカの西海岸と東海岸、イスラエル、インドのそれぞれの「糖尿病と妊娠に関する研究会」が主体となって、IADPSGが創立された。代表者はProf. Boyd Metzger、ChairはProf. David McIntyreが長年務め、2016年3月よりProf. Fidelma Dunneに交代された。

第1回IADPSGは、1998年8月Prof. Jeremy Oatsが会長となりAustralia, Cairnsで開催された。多数の参加者があり、日本からは和栗、小浜、大森らが発表した。美しい海への学会主催ツアーがあり、とても楽しい会合であった。

第2回IADPSGは、2003年8月29日～9月2日、Spain, Sant Salvador, Coma-Rugaで開催され、第35回DPSGとの共催で、ChairはProf. Alberto de Leivaであった。IADPSG大会に加えて、卒後教育大会もあり、参加者156名中、日本医師17名、そのうちの3名、清水、穴澤、大森が司会者に、また大森は卒後教育大会の演者にもなった。口演は三田尾、鮫島、佐中の3名、ポスター発表は6名であった。学会主催バスツアーもあり、講堂は有名なチェロ奏者カザルスの記念ホールで、それだけでも格調高いものであったが、プログラムもまた美術書のように美しいものであった。

第3回は2010年4月8～9日、USA, PasadenaでProf. John KitzmillerをChairとし、Chicagoの第6回国際GDM会議と共催であった。参加者は235名で、Oral presentationは多くがinvited speakers、一般参加はPoster session、ツアーは自由時間に各自で行った。GDMとの合同学会であったので、世界各地区に分かれてGDMに関する討議、討論会がもたれたことが特徴的であった。

第4回は2012年2月24～26日、India, Chennaiで開催され、ChairはProf. V. Seshiahであった。発表は36名の招聘演者のみで、Posterは6題しかなく、sessionは行われなかった。参加者は多数であったが、インドの医師が目立った。学会主催のバスツアーもあった。日本からの参加は招聘演者の大森を含め、わずか4名であった。

第5回は2016年3月21～23日、Argentina, Buenos Airesで開催され、ChairはMaria Faingold

であった。口演はすべて招聘演者のみであり、Poster session の参加は現地医師が多数であった。Universidad Católica Argentina の大学講堂で行われ、Gala dinner もバスツアーもなく非常に質素であったが、南アメリカの参加者が多く盛況であり、時にスペイン語の発表で英語の通訳がなされていた。日本からの参加は安日と大森の2名のみであった。

さて、この折、各国の代表者会議があり、突然、次回（第6回）の開催国の選定が議題に出された。私は、理事長の許可を得ていないと断りながらも手を挙げたら、満場一致で日本に決まってしまった。この決定を受けてすぐに平松理事長に連絡したら案の定「理事会も理事長も通さないで、そんな重要なことを決めてこないでくれ」とお叱りを受けた。学会の代表者（大森）といえども独断はよくないが、私としては日本がこれ以上他国に追従す

るわけにはいかないと思い、立候補をした次第である。一方、この件に関する理事長としての責任感の強さと誠実さに打たれながら、その後、矛を収めていただいたことに感謝申し上げる次第である。

5回の学会を通して、1会場で開催され、第1回、第2回を除いてすべて招聘演者で構成されていた。

日本からすべてに招聘演者となったのは大森安恵のみである。代表幹事は初代赤澤昭一と大森安恵、その後、豊田長康と大森安恵、現在、杉山 隆と大森安恵が務めている。

第6回の学会が本邦でどのように展開されるのかは、まだ想像の域を出ない。しかし、本邦における今後のこの分野の国際的な発展のためにも、学会員すべてのご理解と積極的なご参加をお願いする次第である。

第34回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会のご案内

日時：平成30年11月23日(金)・24日(土)

会場：パシフィコ横浜 アネックスホール



第34回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会長

守屋 達美

北里大学健康管理センター
センター長

2018年11月23日(金)と24日(土)の2日間にわたり、第34回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会を横浜「みなとみらい」のパシフィコ横浜アネックスにて開催いたします。

近年の「糖尿病と妊娠」の分野の発展は目覚ましく、子宮内胎児環境の重要性に始まり、妊娠前女性の教育から妊娠中そして分娩後の管理、さらには将来の児の予後だけではなくその教育まで、長期間にわたる連続性をもったケアなどさまざまな分野が注目されています。医療者側としては「母子ともに妊娠前中後すべての期間にわたって常に継続してみていく姿勢」をもつことが必要であり、さまざまな職種の有機的な連携が重要と考えています。

本年次集会では今までの流れも継承し、チーム医療の有機的な構築も含め「糖尿病と妊娠—この重要な概念を

如何に次世代に伝えるか」をテーマとし、この分野の次世代への継承・啓発・教育に重点を置くプログラムを考えています。

糖尿病・妊娠学会の年次学術集会は、関東においては東京での開催が多く、実は横浜での開催は初めてのことになります。学会場のパシフィコ横浜は「みなとみらい」の海沿いに位置し、横浜ベイブリッジや横浜港などの絶好の風景を楽しむことができます。11月23日(金)は祭日ではありますが、むしろそのために参加しやすいのではないかと拙考しています。3連休の方もいらっしゃると思いますので「みなとみらい」から少し足を伸ばして、横浜赤レンガ倉庫・大さん橋・元町・中華街などをお楽しみいただいてもよいと思います(ただし学会期間外に)。「糖尿病と妊娠」には、本学会の会員の皆様だけではなくさまざまな分野の方々の関与が重要と考えますので、皆様お誘い合わせのうえ多数のご参加をお待ちしています。



周産期の話から

米国母体胎児医学会 (SMFM) Pregnancy Meeting：糖尿病関連演題は全演題の 7%！

産科医を対象にした全米最大の学会である第 37 回米国 SMFM (Society for Maternal-Fetal Medicine) Pregnancy Meeting 2017 が 2017 年 1 月 23 ～ 28 日、米国ラスベガス市で開催されました。今年は世界各国から 2130 題の応募に対して採択 940 題、採択率は 46%の狭き門で、文字どおり周産期関連臨床学会の最高峰です。糖尿病も主要な分野の 1 つであり、その関連演題は 64 題（採択演題の 7%）、なかでも採択率 5%の難関突破の oral session の栄誉を得たわれわれの発表「GDM 既往女性の母乳哺育によるインスリン抵抗性改善効果に関する研究」は、国立病院機構病院の 11 周産期センターの前方視的多施設共同研究です（昨年、岡山市の本学会でその一部を報告）。長崎医療センターからは他にポスター 2 題（いずれも DM 関連演題）も採択される幸運に恵まれましたが、日本からの first author 演題は合計 4 題と低迷しています。DM 関連演題は「妊娠初期からの GDM 管理は周産期予後を改善するか？」（No）、「GDM の妊娠中の良好な管理は次回妊娠の GDM 再発を予防できるか？」（No）、「産褥 1 日目の食後血糖値は産褥 6 ～ 12 週の OGTT 異常を予測できるか？」（Yes）、「分娩時の血糖コントロールを 60 ～ 100mg/dl に保つことで新生児低血糖発症を 64%低下させる」など、興味深い演



題の数々でした。今回、DM 関連でひときわ目立っていたのは、6 演題を報告した Alison Stuebe 女史（写真右端筆者の隣）率いるノースカロライナ大学産科グループでした。彼女は、全米の nurse health study (NHS) の大規模データを用いて母乳哺育の将来の糖尿病発症予防効果を初めて報告（JAMA 2005；294：2601-2610）したことで日本でも有名ですが、とても気さくな方で、そのうち本学会の招聘講演にお招きしてはいかがでしょうか。

ラスベガスの最後の夜、ご当地で今、トランプマジックで人気急上昇中のマット・フランコ・ショーを楽しみました。すごい！必見！マジックは人々を幸せにします。外ではトランプタワーがそびえ立つラスベガスはまさに大人のディズニーランド。マジック以外に私の興味をそそるものは皆無でしたが…。

（文責：長崎医療センター産婦人科 安日一郎）

小児肥満対策の現状

平成 28 年度より「学校保健安全法施行規則の一部を改正する省令」によって、子どもたちの成長を評価し、栄養不良または肥満・やせ傾向を発見するために身長・体重の成長曲線を積極的に活用するように定められた。これにともない全国の小中学校では、児童生徒一人ずつの成長曲線の作成が始まった。これまでの小中学生の体格評価は、主に横断的評価であった。しかし、成長曲線作成によって縦断的評価が可能となり、介入すべき肥満、やせの発見が容易になった。また、日本肥満学会が 2014 年に小児肥満症診断基準を 12 年ぶりに改訂し、近々「小児肥満症診療ガイドライン 2017」を発刊予定である。今回の改訂で特筆すべきことは、診断基準の参考項目に低出生体重児および高出生体重児が加えられたことである。Pedersen 仮説と

Barker 仮説で説明されるように、不適切な胎内環境が小児期以降の肥満症に関連するという事項が診断基準に採用された。このように、小児肥満に対する対策は着実に推進されてきている。実際に、学校保健統計での肥満傾向児の頻度は最近 10 年間では横ばいあるいは減少傾向であり、2015 年での 14 歳時の肥満傾向児は約 8%である。一方、やせ傾向児の頻度は横ばいから増加傾向にあり、2015 年での 14 歳時のやせ傾向児は男子約 2%、女子約 3%である。やせ小児に対する対策は推進しておらず、とくに非病的やせへの具体的な対応策は皆無といっている状態である。本学会活動によって、小児保健、学校保健に関わる各職域の方々が、思春期の肥満、やせが次世代の健康に悪影響を与えることを認識するようになることを期待したい。

（文責：埼玉医科大学小児科 菊池 透）

トピックス

DIP2017に参加して

青空にいく筋もの飛行機雲。おだやかな初春のスペイン、バルセロナにおいて、3月8～12日に The 9th International Symposium on Diabetes, Hypertension, Metabolic Syndrome and Pregnancy (DIP symposium) が開催された。今年も77カ国から多数の参加者があったが、残念ながら日本からの参加はわずかであった。今回から“Maternal Medicine meets Fetal Medicine”がテーマとなり、母体の高血糖や肥満は胎児、新生児に影響を与えるが、さらに児のその後の人生においても肥満、耐糖能異常、高血圧、そして精神神経疾患のリスクを高めることなどが報告された。朝7時から夜8時まで講義や報告が続き、その内容は多岐にわたるが、私個人としては普段はあまり聴く機会のない児の出生前診断や preeclampsia の診断など大変興味深く聴くことができた。産科、内科、小児科すべての科に役立つ内容となっており、今後は日本からも多くの参加を期待する。



一般演題はすべてポスター発表となるが、前回の第8回よりE posterとなった。300以上のポスターを4～5個程度のスクリーンで見なくてはならず、すべてを見ることは難しかった。しかし、シンポジウムのアプリをダウンロードすると、そこからポスターのリストを見たり、質問やコメントを送って参加者同士でコミュニケーションを取ることも可能となった。“このポスターは絶対にみるべき”“いいね”などのコメントがあったそうである（演者自身かもしれないが）。学会の形態も変わっていくようであり、ガラ携派の私も次回からはポータブル端末を持っての参加が必要そうである。

世界でもっとも有名な教会であるサグラダ・ファミリアを訪ね、糖尿病の予防にもなる地中海料理を堪能し、充実した時を過ごすことができた。次回は2019年春イタリアで。

（文責：東京女子医科大学糖尿病センター 柳澤慶香）

今後の当会年次学術集会の開催予定

第33回年次学術集会



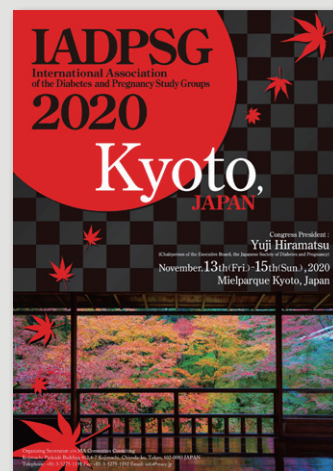
日時：2017年12月2・3日
会場：シーガイアコンベンションセンター
会長：鮫島 浩（宮崎大学）

第34回年次学術集会



日時：2018年11月23・24日
会場：パシフィコ横浜
会長：守屋達美（北里大学）

IADPSG2020



日時：2020年11月13-15日
会場：メルパルク京都
会長：平松祐司（岡山市立市民病院）